



道元——その行動と思想——

日本人の行動と思想 3

道元 —その行動と思想—

今枝愛真



日本人の行動と思想 3

評論社

日本人の行動と思想 3

日本人の
行動と思想 3 道 元

昭和 45 年 4 月 1 日 初版印刷
昭和 45 年 4 月 10 日 初版発行

¥ 590

著 者 今 枝 愛 真

発 行 者 竹 下 み な

印刷所 三 倉 印 刷
製本所 有限会社友晃社製本

発行所 株式 評 論 社
会 社

(〒101) 東京都千代田区神田神保町 2 / 16

電話代表(265) 1 9 6 1

振替東京 7 2 9 4

(検印省略)

落丁、乱丁本は本社にてお取りかえいたします。

(A-1)

はしがき

春は花夏ほととぎす秋は月

冬雪さえて冷しかりけり

これは、「本来ノ面目」と題する道元（一一〇〇—一二五三）の和歌である。昨年、ストックホルムのノーベル賞受賞記念講演のとき、日本人の自然観の代表的な例として、川端康成はこれとその冒頭にかかげた。道元には、このようなこだわりのない自然愛の一面があるが、他面、「人とは何か」「人はいかに生くべきか」を徹底的に追求しようとした、きびしい理想主義がある。

若い時代には、まるで岩清水のような清冽さをもっていたのに、後になると、もっと下流にくだったような趣きが出るのが、一般である。人はこれを、円熟とか大成という。ところが、道元はそうではない。水の流れに抗して、岩清水まで遡るのである。つまり、円熟どころか、かえってその純粋な理想主義は、年とともに蔽しさを増しているのだ。まさに日本人ばなれのした超絶的なところがある。そこには、宗教的慈悲への甘えなど微塵もない。冴えきった冷徹さがますます研ぎ澄まされているのである。周囲となじめないものが生じてくるのは当然といえよう。

ところが、道元の思想と行動には、不思議な魅力がみちみちている。決して無味乾燥な気むずかしさだけではない。これまでの伝統的な学問や先入観にとらわれないで、経文や祖師の語録を徹底的に解きほぐし、そのなかから、道元自身の思想を生み出し、さらに思索を進めるとともに、独自の表現によって、新たな思想を生んでいる。そこには、一語一語が新鮮な意味をもって甦っている、といってよい。そして、緻密な論理のなかに、どれほどゆたかな知性が秘められていることか。一日日本人によって、これほど仏教思想が独創的な飛躍をとげたことは、前にも後にもないであろう。まさに空前絶後というべきである。

もとよりそれは、哲学の体系のようなものではない。また、常人にはあまりにも激しすぎて、すべての人には首肯されないかもしれない。だが、現代のような人間疎外、自己喪失の時代においては、時流に圧倒されないために、主体的な自己の哲学を確立し、人間性を回復することが、何よりも急務であろう。このような意味で、仏教の真理がなんであるかを、前人未踏の境地まで追求してやまなかった、道元の真摯な姿には、現代人が見ならうべきところが決して少なくない。しかも、道元のユニークな発想法と思索の進め方、強靱な論理とその新鮮さは、つねに、かれの『正法眼蔵』を読むものに、新たな自信と救い、そして励ましさえもあたえてくれる。道元が現代人に歓迎される秘密は、そこにある。

こうして、道元の思想は、鎌倉時代の産物であるにもかかわらず、時代を超越したものとして、そのまま、今日的な思想や宗教となりうるものを多分にもっている。曹洞宗の信徒だけでなく、哲学者や思想家・文学者などの間にも、ひろく道元の思想の崇拝者が絶えないのは、そのためであらう。

このため、和辻哲郎の名篇「沙門道元」をはじめとして、これまでに、いくつかの優れた道元像が書かれてきた。しかし、それらのなかには、史料批判などの点で、今日の学問の水準からみて、問題なしとしないものがある。小著においては、いささかこのような点についても配慮したつもりである。

昭和四十五年二月八日

今 枝 愛 真

目次

I 生いたちとめざめ — 少年期 — 13

1 出生 13

道元の母 薄幸の美女

道元の父 源通親

誕生の地

2 天台宗の門徒となる 22

出家の動機 叔父の良観をたよる

3 山門より寺門へ 26

仏法房道元として出発 叡山への絶望

人はなぜ修行するのか 三井寺に下る

公胤入宋をすすめる

4 禅との接触 31

榮西との相見 明全に入門

承久の乱おこる 正法眼蔵随聞記の史料的价值

Ⅱ 渡宋の禅師 — 在宋の時代 — 43

1 入宋遍歴の旅 43

老典座の一撃

中国禅界の動向

列位の是正を上訴

洗面の法

巡歴の旅に上る

万年寺による

老典座との再会

天童山で無際に学ぶ

いずれの時をか待たん

嗣書を見る

径山で浙翁に参ず

2 如浄との出逢い 67

如浄の禅風

明全の死にあう

天童山の修行生活

身心脱落

一夜碧岩

参学の大事

ふたたび阿育王山を訪う

宝慶記

道元の嗣書観

空手還郷

Ⅲ 新しい禅の独立 — 京都・深草の時代 — 83

1 禅の独立宣言 83

弘法救生

普勧坐禅儀を著わす

	安樂の法門	建仁寺より深草へ
2	深草の閑居	90
	極樂寺跡にうつる	辨道話を著わす
	仏法の正門	一向の坐禪
	念仏祈禱を排す	専修の禪
	只管打坐	修証一如
	出家と在家	末法の否定
3	興聖寺の開堂	104
	興聖宝林寺	風鈴の頌
	現成公案の巻	学道の用心
	典座教訓を著わす	重雲堂式の巻
	眼藏シリーズすむ	男女平等論
4	大恵派の合流	120
	一向の禪院	鎌倉禪の動き
	大日房能忍の禪	大恵派の集団入門
	臨濟観の変化	大恵派批判
5	『護国正法義』の撰述と東福寺の成立	137
	第二の法難	『護国正法義』の主張
	圓爾の上洛と東福寺の創建	

6 道元の思想とその展開 141

坐禅箴の巻

行持の巻

釈尊の行持

一日なさざれば一日くらはず

趙州古仏の家風を慕う

如浄の行持

一日の行持

布施の心

愛語

IV 正法禅の確立 — 越前の時代 — 161

1 北越入山 161

なぜ越前を選んだのか

波多野義重のすすめ

白山の天台

法華経は諸経の大王

2 越前山奥の説法 169

禅師峰の留錫

吉峰古寺の説法

思想の純化

禅宗の称号をしりぞける

五家七宗の称号を否定

曹洞宗の称号も否定

五位説等の批判

人天眼目をしりぞける

三教一致思想の否定

3 永平寺をひらく 182

大仏寺の落成

永平寺と改称

出家の巻

4	鎌倉行化	190
	北条時頼の招聘	
	十首和歌	
	越前にかえる	
5	在家成仏・女人成仏の否定	199
	普勸の二字	
	出家主義の徹底化	
	広大の慈門	
	居士批判	
6	最後の説法	210
	八大人覺を説く	
	永平寺を懷辨にゆずる	
	道元の死	
	正法眼蔵の修正	
	療養のため上京	
	道元に禅師号なし	
	主要参考文献	217
	略年譜	223
	さくいん	242
	挿図目次	
	普勸坐禅儀(道元自筆)	
	道元の画像	
128	巻頭	

建仁寺の仏殿	32
栄西の木像	33
道元の入宋関係図	44
天童山の仏殿	45
明全戒牒道元識語(道元自筆)	54
阿育王山の景観	61
漸翁如琰偈頌	62
径山の大雄宝殿	64
天台山万年寺	66
長翁如浄画像	68
一夜碧岩	81
拙菴徳光偈頌	129
大恵宗杲尺牘	130
永平寺の遠望	163
越前における道元の足跡	165

道

元——その行動と思想

I 生いたちとめざめ — 少年期 —

1 出生

偉大な人物の生涯に悲劇的な要素をあたえることを、運命は好むものである。仮借なくかれらの道を阻む擾乱じょうらんを乗り越えて、深奥に到達できた高邁な精神、時代をこえて、何ものにも妨げられずに聳え立っているものであればこそ、人々は畏敬の念をもって、仰ぎ見るのである。しかし、このような偉大な人物の伝記は、とかく潤飾されやすいものである。ことに、その出生などにおいて、そうである。では、ここに語ろうとする道元の場合は、はたしてどうであらうか。

一般に、道元の父は内大臣源通親、母は摂政太政大臣松殿基房の娘である、といわれている。

道元の母

そこでまず、道元の伝記として信憑度が高いとされている『永平寺三祖行業記』をみると、道元は、母方の叔父良観法印を比叡山の麓に訪ねて、出家を求めていることが

しられる。してみると、良観は松殿基房の子であるから、道元の母は、基房の娘であったことがしられる。

このように、道元の母が基房の娘であったとすると、どの息女がそれにあたるのであろうか。そこで、『尊卑分脈』をみると、基房には四人の娘がいたことがしられる。そのうち、一女は一条高能、次女寿子は九条良経、四女は近衛公明に嫁している。ただ三女の伊子だけは、従三位とあるのみである。したがって、道元の母は、この三女ではなからうか。

薄幸の美女

寿永三（一一八四）年正月、木曾義仲の都落ちのときのことである。かれは、命旦夕に迫っていることを知って、最愛の女性との別離に対する執着を、容易に断ち切ることができなかつたのであろう。

六条高倉なるところに、はじめて見そめたる女房のおはしければ、それへうちいり、最後の名ごりおしまんとて、とみにいでもやらざりけり。いままありしたりける、越後中太家光といふものあり。いかにかうはうちとけて、わたらせ給ひ候ふぞ。御敵すでに河原までせめ入て候に、犬死にせさせ給なんぞ、と申しけれども、なを出もやらざりければ、さ候ば、まづさきだちまいらせて、四手の山でこそ待まいらせ候はめ、とて、胸かききてぞ死にける。木曾殿、われを